



## 校長室だより 4号

中 島 悟

- |             |            |                   |
|-------------|------------|-------------------|
| 1 「学校創設のころ」 | 初代事務長 酒井義明 | 20周年記念誌(特別寄稿)より抜粋 |
| 2 出逢ったいい話   | 「足なし禅師」    | 『致知』2007年3月号より抜粋  |

「学校創設のころ」(原文) 創立時の記録が詳細だったので3号に引き続き掲載

秀峯小松山を遥かに望み、酒谷川、広渡川の清流に挟まれた小高い山なみの一角に、県教委と日南市の要望があり、陸上自衛隊第5施設団(福岡市小郡)第305地区施設隊(都城)で県立日南振徳商業高校敷地造成工事が着工されたのは、昭和44年7月4日です。

作業隊は野崎盛利隊長(南郷町在住)以下50名で市内の公民館に宿泊し、大型ドーザ10台、グレーダー1台、スクレーパー2台に大型トラック数台の編成で工事規模は工量、切盛土76,370m<sup>3</sup>、整地面積35,100m<sup>2</sup>、殿所地区と東光寺橋までは、山道で兎道程度の小さな道しかありませんでしたので、学校の登校道路として東光寺橋から学校までと星倉トンネルから学校まで、現在の道中の道路の作成工事でした。当時の井戸川市長、市工事担当者の石灘氏、県教委国府総務課長(学校施設課はまだ創設されていない)押方係長等々との緊密な連携と、炎熱猛暑の中での大岩石の爆破作業、騒音、土作業と、はこりと汗の難工事が概ね3ヶ月、事故もなく9月19日に完了したのであります。本当に御苦労様でした。

昭和45年2月1日、筒井憲二先生と私に開校の準備をするため日南高校に勤務するようにと発令されましたが、開校まで2ヶ月しかなく、さて何から手をつけてよいやら分かりません。当時の日南高校の高橋四郎校長先生と筒井先生と3人でいろいろと話し合ったものでした。

2月6日に県教委で説明会があり、初めて学校の図面等をいただきました。さあいよいよ開設事務の本格的な始まりです。筒井先生は学校教育目標、基本方針、校訓、努力事項や制服、制帽、校章、父母の会、生徒会のこと等大変でした。私は建物の配置に関する基本的な事や、自転車置場、売店、焼却場の設計や場所、庭園や植樹、机、椅子の備品の購入計画等苦労したものでした。現在の校門附近と1棟北側の大きなカイヅカイブキと校門前の土手の銀杏は日南高校からいただいたものですし、フェニックス、ココス等、県運動公園や清川さん、田上さんの御寄贈のものもあります。中学校への説明会、日南高校校舎、教室での入学試験、合格者発表、入学説明会も全て3月25日に終了し、4月1日校長先生はじめ教職員の発令がありました。4月10日、待望の第1回入学式が第2棟3階の大教室(普通教室2室分)で行なわれましたがこの日は雨で校門から玄関までは泥んこでぬかり、大教室は入学式場は、壁の塗料の中のシンナーがまだ残っていて臭いで気分が悪くなられるお母さんもありました。

第1棟が半分と第2棟と少しばかりの自転車置場だけで生徒の授業、学校行事、部活が始まりました。先生10名、生徒182名の小さな学校でしたが皆張り切っていました。第1回は伝統と校風と歴史はわれわれが作るのだとの気概と既設商業高校に追い付け追い起せの合言葉に2年目には珠算、タイプライター競技で九州大会、全国大会へ出場する程になり、又陸上部の活躍は大変なもので、緑の旋風を巻き起し、後年全国大会で優勝の栄えを得ました。

教室等のことを少し書きますと、第1棟の1階保健衛生室は職員室と兼用、今の進路指導室が校長室兼会議室兼事務室でした。図書室は第2棟の2階の一番西側の教室です。

東光寺橋からの通学道路の舗装は3年後に日南市で施行していただきましたが途中に2軒の農家があるだけで、今とは考えられない淋しい道でした。勿論産業道路から橋を

建設していただくお願いはしておりましたがまだ出来ていません。両側が山と杉や竹の林で昼でも薄暗い所もあり鶯や時鳥の名調子も聞かれ、雉子や小ジュケイが自転車の前を横切ることもありました。然し朝、登校時に青くて大きな山ミミズや蛇、蛙等も道に出ていて、びっくりしたことも当時の卒業生の思い出のようです。尚、痴漢も時々出没して心配をしました。市当局や九電にも補助をしていただいて40数個所に街灯を設置したものでした。

何しろ草創期の事で何も彼も不揃いでしたが、日野PTA会長や理事の方々も、筒井校長始め教職員、生徒達、皆一所懸命でした。

それから12年間振徳商業高校にお世話になりまして宮崎南高校へ転勤しました。開設からもう20年ですね、立派になりました。創立20年を記念して、心からお祝いを申し上げますとともに今後のますますの御発展をお祈り致します。

## 出逢ったいい話 「足なし禅師」と呼ばれた禅僧：小沢道雄師のお話です。

大正9年生まれの小沢道雄師は、幼年期に曹洞宗の専門道場で修行。戦争で満州へ赴きます。昭和20年、25歳で敗戦。シベリアに抑留され強制労働。だが、肩に受けた銃創（じゅうそう）が悪化し、役立たずは不要とばかり無蓋（むがい）の貨車で牡丹江の旧日本陸軍病院に後送される。

氷点下4、50度の酷寒に夏服のままで、支給された食料は黒パン1個、飲み水もままならず、3日間を費やした行程で死者が続出した。小沢師は死こそ免れたが、両足が凍傷に侵された。膝から切断しなければ助からない。その手術の担当軍医は内科医で外科手術はそれが初めて。麻酔薬もない。メスを執った軍医がしばらく祈るように目を閉じた姿を見て、小沢師はこの軍医に切られるなら本望だと思い定めた。

想像を絶する激痛。歯がギリギリ噛み合い、全身がギシッと軋（きし）んで硬直した。すさまじい痛みは1か月余続いた。

8月に突然の帰国命令。歩けない者は担架に担がれ、牡丹江からハルビン、奉天を経てコロ島まで、1,500kmを徒歩で行くことになった。だが、出発して3日目の朝、目を覚ますと周りには誰もいなかった。満州の荒野に置き去りにされたのだ。あらん限りの大声で叫んだ。折よく通りかかった北満から引き揚げ途中の開拓団に救われたのは、僥倖（ぎょうこう）というほかはなかった。

崖っぷちを辿るようにして奇跡的に帰国した小沢師は、福岡で再手術を受け、故郷相模原の病院に送られた。母と弟が面会に来た。「こんな体になって帰ってきました。いっそのこと死のうと思いましたが、帰ってきました」と言うと、母は膝までの包帯に包まれた脚を撫で、小さく言った。「よう帰ってきたなあ」

母と弟が帰ったあと、小沢師は毛布をかぶり、声を殺して泣いた。懊悩（おうなう）の日は続いた。気持ちはどうしても死に傾く。その果てに湧き上がってきた思いがあった。

比べるから苦しむのだ。比べる元は27年前に生まれたことにある。27年前に生まれたことを止めて、今日生まれたことにしよう。両足切断の姿で今日生まれたのだ。

そうだ、本日たったいま誕生したのだ。足がどんなに痛く、足がなく動けなくとも、痛いまんま、足がないまんま、動けないまんま、生まれてきたのだから、何も言うことなし。本日ただいま誕生！深い深い覚悟である。

- 1、微笑を絶やさない
- 1、人の話を素直に聞こう
- 1、親切にしよう
- 1、絶対に怒らない

小沢師はこの4つを心に決め、58年の生涯を貫いた。命の炎を燃やして生き抜いた足なし禅師の人生だった。